
ホストクラブ「Yamato-nadeshiko」番外 「逢瀬」

y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホストクラブ「Yamatō-nadeshiko」番外「逢瀬」

【Nコード】

N0761G

【作者名】

y

【あらすじ】

ホストクラブ「Yamatō-nadeshiko」本編（<http://ncode.syosetu.com/n4852d/>）その後の時間設定。豪は光を襲った夜から酷くやつれ、後悔を繰り返していた。それを彼の店の社交から聞いた光は豪をneo新宿御苑に呼び出す・・・

(前書き)

?表サイトの本編はこちらになります

<http://syosetu.com/pc/main.php>

?m#w1-4&ncode=N4852D

?続編になります(18歳未満閲覧禁止)

<http://syosetu.com/user/novelimanga>

[n a g e / t o p / n c o d e / 3 9 3 4 6 /](http://syosetu.com/ncode/39346/)

「・・・気付かれないよね・・・」

光はマンションの扉を開け、廊下をきよきよと見回す。午後1時のネオ新宿の高級マンションの住人は深夜稼業の者が多い。同階に住んでいるNO.2の暴は昨夜アフターだった筈だからまだ寝ている筈――

「・・・ふう」

エントランスを出てタクシーに乗り込む

「ネオ新宿御苑までお願いします」

そう運転手に声を掛け、その手の中の荷物を膝に抱える

「お客さん、随分大きな荷物ですね。足元置いたら？」

「いえ、お弁当なんで形崩したくないですから」

運転手はバックミラーで確認した美少年に、どこかで見たようなという意識で声を掛けて来る。淡い色のジャケットに身を包んだその非常に洗練された人物は美少年なのか美少女なのかちょっと分からない。だがこのネオ歌舞伎町ではその区分が曖昧な客は多いのだ。詮索しないことが運転手の条件。車は発進した

> i 2 2 6 0 — 3 2 2 <

「ネー・・・光ちゃん。アノネ・・・」

「どうしたんですか 그레이シィさん？元氣ないですね」

昨夜クラブで 그레이シィら美女に囲まれていた光は彼女の顔を覗き込む。何時もの元氣で明るい彼女ではなく、その表情は暗い

「んーとネー・・・ボス、がね・・・元氣ナイ・・・いつもコワイの・・・」

그레이シィは言いづらそうにそう呟く。キャンサー・G・・・豪が元氣がない、と

「いつも事務所でコワイ顔して、私達が話しかけても何も言わない
ー・・・店にも全然出てこないし・・・いつもイライラしてフキゲ
ン」

光は豪の顔を思い出すー二週間前、彼を自室に迎え入れ介抱し
ようとしてーその感情をぶつけられた。決して恐怖は無く彼の
哀しみと痛い程の誠意だけが伝わってきたあの夜をー思い出す
「俺はしばらくあのクラブには行かねえ・・・代わりに女共行か
せる。勿論お前を指名だ」

「許してくれるかどうか分からねえがー連絡をくれ、一言で
いい、からー」

そう、背中しか見えなかったけれど、涙は止めていたかもしれない
けれどー彼の全身は泣いていた。自分に許しを請うように。抱
擁されても胸を開かれても決して彼は乱暴ではなかった。自分に対
してどうしていいか分からないようにただ信用して欲しいと必死に
訴えていたことが分かった

「私達、ボスのことスキだよ。ダメなことすれば怒るし凄くコワイ
けど・・・ちゃんとガンバレちゃんとオカネくれるし、無理に働
かされるコトもナイもん・・・ネオ群馬っていうオンセンの仕事で
泣いてた私を助けてくれたし・・・だからね、きつとボス、光ちゃ
んに会ってないから元気ないんだよ、お話してほしいんだヨ・・・
ボス、光ちゃんのコト大好きなんだよきつと。なんで最近私達だけ
来させるのかワカンナイけどさ、光ちゃんメールとかしてアゲテよ
ー。きつとボス元気になるよ・・・明るいボスのが私達スキだよ・・・
」

それ程までに豪は堪えているのだろうか。あの後彼に連絡しようか
と何度も思ったが自分には大切な存在がいる。彼が反対することは
分かりきっていたーけれど

「キット喜ぶよー」

他の美女達もうんうんと自分を見るー

「ボスが来たらもつともつとオカネ使ってくれるよ！あの黒いのに

負けない為だ！そうだよ！そうダー！」

グレイシイが月弥のテーブルを指差す――何人も客に囲まれている黒い存在。客同士がテーブルに來いと騒いでいる。それを小千が穏やかに収めて、自身は無関心に冷たく薄い微笑を浮かべ――強烈なる存在。たった半期で彼――彼女はNO・5まで上がった

いた

「そ・・・そういうのは・・・私は・・・」

困惑する。そんな計算は決して無い――焦りは無い――けれど負けたく、ない

「メールしてよ今！ネー！」

気付かれないようにNO・2のテーブルに視線を向ける。貴子と話している。今なら――

「じゃ、じゃあ――」

携帯を取り出し、文字を打つ

「――あ、豪さん・・・もういらしてたんですか・・・」

ネオ新宿御苑――広大な国定公園には何箇所か東屋のような休憩所が設けられている。勿論暖房は効いており軽食なども可能で持ち込み等も出来る。休日は非常に混むそこも、平日の昼間であることから管理従業員である中年の女性がいるだけだった

「ああ――一秒でも早くお前の顔が見たかった」

豪は待ち合わせ場所である東屋の壁にもたれ掛かるように立っていた。2m近いその偉丈夫な体格をダークブラウンのコートに包み、常のサングラスを掛けている。黒い手袋には紙包みが握られていた

> i 2 2 6 1 ― 3 2 2 <

「遅れてすみません――寒くないですか？中で待ってて下さって良かったのに――」

走り寄る。吐く息が白い冷気に彼はただそこに存在していた。非常に存在感がある夜の世界の住人は昼間の緑の中では異彩を放っていた。・・・お前は遅れてねえよ。ただ俺が。。。一秒でも早くお前を見たかったんだよ。。。そんだけだ。。。お前こそ寒いだろ。早く中入んな。。。」

光を促すように扉を開け、後ろから彼も入ってくる。だが一定の距離を空け、その表情は冷気に凍ったように陰気で、その頬はやつれているように生気が無かった。あの陽気で明るい彼はどこへ行ってしまったんだろう？グレイシィ達の心配は最もだった

「何か飲むか？俺は車だから紅茶でいい」

店内に誰もいない4人掛けのテーブルに座り、そう話しかけて来る。中年の女性が歩み寄ってきて注文を伝票に書き込む

「あ。。。じゃあ。。。温かい烏龍茶をお願いします」

中年の女性はカウンターに戻っていく。シン。。。と互いに口を開かない

「あ。。。あの。。。昨夜いきなりメールしてすみません、でした。。。」

光はその雰囲気になえ切れず口を開く

お元気ですか。あの夜の事、もう私は気にしていません。またお話して下さいませんか

と。。。すると即レスが来た

ありがとう

そう、一言

それだけだった。その一言にどのような意味が込められていたのか。言訳など一切しない彼がその言葉を打つまでの日。。。どれだけ苦悩したのだろうか

宜しければ、お時間ある時にお話しませんか。お店は落ち着かないので、どこか外で

また、即レス

大丈夫なのか？ヤツがいるだろ

少しだけなら大丈夫です。私謝りたいんです

謝るのは俺だ

ですから・・・どこか静かな所で

昼間なら、人目がある外でならお前は心配ないか？怖くないか？

怯えないか？

思わず電話をしようと思った。余りにも彼は怯えている。自分が怖がるのではないかと怯え、精一杯の言葉でそう提案しているのだ。そんなことは大丈夫だと心配してないと、貴方を私は信用していますとー自分の声で伝えたかったが、ここは店だ

明日午後一時にネオ新宿御苑の3番東屋では如何ですか？一緒にごはん食べませんか？お食事抜いてきて下さいね

努めて明るく、絵文字もつけた。食事をするだけだ。それを食べ終えればそこでお開きにも出来るのだーそれに彼はあの夜妹の作った弁当を持ってドライブに行ったりーと、とてもとても嬉しそうに陶醉したように呟いていたのを強烈に覚えている。おこがましいかもしれないが、ここまで誠意を尽くしてくれた彼に対し少しでも慰めになればと、チョコレートを渡した時のようにただ彼の傷を曝け出す真似をしないように、そう提案した

ありがとう。じゃあ明日

そう、今度は時間が経ってから返信が来た

「メールは・・・すげえ嬉しかった。来るとは思ってなかったー
ーありがとな、本当に・・・」

豪は自分の顔を見ず、俯いている

「本当に・・・すまなかつた。俺はなんであんなことをしたのか分

からねえ。お前のあの言葉聞いてから何がなんだか分からなくなつた――ただすげえ後悔しているんだ。この二週間すげえテメエが情けなくて仕方なかった。妹を――いや違う・・・繰り返した・・・あの怖かっただろう思いを――お前を、お前を泣かせた――本当に、本当に・・・すまなかった」

テーブルの上に組んだ手が震えている。そこまで彼は自分を責めた。何よりも大切な存在を怯えさせ、涙を流させた。そんな自分にたまらなく嫌悪感を覚えたのだ

「・・・メールでも申し上げましたけど、本当に私もう気にしてません。豪さんを怖いなんて――あの時だって全然思わなかったんです」

それは――過去の忌まわしい記憶が蘇っただけだと――それは言うべきではない。それはただ一人の存在によって乗り越えたのだから――その言葉を聞いた豪は更に頭を下げ、もう一度謝罪した

「・・・何の償いにもならねえと思うが、これ受け取ってくれねえか・・・」

持っていたブランドネームの入った紙袋を光に渡す。その中にはドレスとバッグ

「・・・こんな高価なもの頂けません」

困惑したように光はそれを戻そうとした。そのブランドのドレスは最低でも100万はするものだ。バッグに関しては限定モノの本物だ。ケリーのピンクポーチ。彼は今まで様々な品を強引に買ってくれたが、それ程までに高価な物は無かった

「受け取ってくれ。すぐ捨てていいから、な・・・」

豪は顔を上げ、サングラスを外した――その視線。あの夜と同じ痛い程に真摯で真っ直ぐな、弱い瞳

「・・・おなか空いてませんか？お弁当作ってきたんです！」

余りにも真剣な瞳から逃げるように光は紙袋から幾つもの弁当の包みを取り出した。場の雰囲気を読んだのだろう。従業員の女性が無言で飲み物を運んできた

「・・・弁当・・・？」

おにぎりや五目稲荷のランチボックス、卵焼きやウインナー、アスパラのベーコン巻きなどの温かい焼き物のボックス、パスタや海老ブロッコリーなどを色鮮やかに和えたサラダのボックス、鳥賊や鳥の揚げ物、蕪や胡瓜の生姜の漬物――様々な食材がテーブルに色とりどりに並べられる

「あまりおいしくないかもしれないですけど・・・」

ナプキンにおにぎりを一つ包み豪に差し出すと――彼は暫く動かなかったが、手袋を外しそれをそうつと受け取った

「・・・食っていいのか・・・？」

「勿論です！どうぞ」

笑顔を精一杯に作り光は笑う。豪は小さなかわいらしいおにぎりを一口で口に入れた

「・・・すっげ、旨い・・・」

口を動かしながらそう呟く

「もう一個どうぞ・・・それおかですか？高菜大丈夫ですか？」

差し出されたそれを受け取り、また一口で食べる

「こんな旨いモン初めて食った・・・もっと食ってもいいか？」

「ど、どうぞ――ただの普通のおにぎりですよ？おかずもどうぞ・

・・・」

何だかそんなに褒められると嬉しい反面照れ臭い。胡瓜に生ハムを巻いたものに爪楊枝を刺して差し出すと、豪はそれをそのままぱくりと口に入れた

「・・・旨いな、コレ・・・も」

光は驚く。何だか自分が食べさせているようで、彼は子供のようで――その表情が会った時とは全然違う穏やかな表情になっていく
「・・・お・・・お兄ちゃん、おいしい？」

豪の動きが止まった。光はその言葉を言おうと昨夜のメールの時から思っていた。決して彼の妹の代わりになろうなどという思い上がりは無い。彼の心の傷を癒そうなどという己惚れは無い――ただ、

彼がその言葉を望んでいるのは痛い程伝わっていたのだ。彼は例え虚構であつてもその空間を望んでるのだと――

「・・・ありがとな、お前の作ってくれたモンは何でも旨いよ――」

豪は慌てたようにサングラスを掛けた――その瞳に滲むものを気付かれないように、照れ隠しの意味で。その精悍に整った素顔には笑顔が浮かんでいた

「兄妹？仲良いんだねお兄さん。すごく可愛い妹さんだねえ」

カウンターの中年女性が明るく声を掛けてきた。ネオ新宿御苑に平日昼間から食事をする男女――様々な人間関係があるこの場所で長年勤めている彼女は全てを弁えていた。だからこそ明るく声を掛けてきたのだ

「ああ、おばちゃん！俺の妹可愛いだろ？久しぶりに会ったんだよ――こんなキレーになっちまっってお兄ちゃん嬉しくて涙出そうだぜ？」

その言葉は常の豪の陽気で明るい声だった――光はその彼の姿に微笑んだ

「ごちそうさまでした！すっげ旨かったよ！ありがとね光ちゃん！」
常の笑顔に戻った豪はかなりの量の食材を残さず平らげ、茄子の餡かけの鳥そぼろまでスプーンで掬って食べ切ってから両手をパン！とあてて笑った

「全部食べなくても良かったんですよ・・・？多めに、二三人前作つたのに――おなか苦しくないですか？」

少々の困惑と共に嬉しさもある――料理好きな人間にとってそれを美味しそうに全て平らげて貰うことは非常に嬉しいことなのだから「ぜーんぜん！もつと食いたいけど我慢しなきゃ太っちゃうねえ！光ちゃんの作ったものなら太ってもいいかなあ？いや太ったら嫌われちまうかなー！器は洗って返すよ！ホント美味しかったよ！」

豪は器を意外な程丁寧な手つきでまとめ、包まれていた布に包み直し紙袋に整然と詰めた

「え・・・いいです持つて帰りますからそんなー」

「ーなあ・・・お前とまた会う口実をー希望を持たせてくれねえかな・・・ダメか・・・？な・・・？」

またー子供が母親に縋るような声色だ。ふうと軽い溜息をつきながら光は頷く。その精悍な外見とは正反対に可愛らしいその仕草、どうも彼は憎めない

「・・・少しお散歩しませんか？おなか苦しいでしょうし・・・」
微笑みつつ、そう提案する。今日は勿論出勤だがまだ三時前だ。少し緑の中を歩いてそれで彼とは別れよう。彼は元気になってくれたようだしー

「時間は平気なのか？」

同伴などはないのかと尋ねて来る。勿論それは入っていないー一つ頷く

「じゃあーな・・・もしお前がいいなら少し遠出しねえか？ネオ新宿じゃあお前も俺も顔知られ過ぎてるし・・・何処でバレつか分かんねえだろヤツにさー内緒で来てくれたんだろ？許すわけねえもん・・・勿論8時までにはお前のマンションの前に帰す」
豪は光の顔を覗き込むー信用してくれ、と

「ーいいです、よ・・・」

大丈夫、彼は絶対に自分に危害など加えないしーあの人にこの逢瀬が分かつたらきつと怒られると思う。勿論やましいことなんて無いけれどあの人に少しでも嫌な思いをさせるのはいけない。でも豪となら何度も店外しているしー出勤の一時間前までに帰してくれると言っているのだから

「・・・何でお前そんなに優しいんだろ・・・？じゃあなーそのドレス、着てくれねえか？都心じゃ流石にバレっだろが、郊外に行くから女の服着たって大丈夫だ。な・・・？いいか？」

そう縋るように言われれば頷くしかない。少々の苦笑と共にドレス

の袋を持って洗面所に立とうとすると

「俺の知ってる店行こうな！コートもそれに合わせたモンにしようぜ！そのジャケットコートじゃ微妙だろ？まあお前ならなんだって似合うけどな！」

そう陽気に言うと勢い良く立ち上がり豪は札をテーブルに置くと光の手を引いた

「ご、豪さん？いいですってばー！そんなの・・・」

「いーからいーから！おばちゃんごっそさんー！お茶旨かったよ！ツリはいいからー！さ、行こうな！」

少々強引で、それでも陽気で憎めない彼の魅力は完全に戻った。光はその彼が嫌いではない。その豪快で陽気な男性的な魅力はどんな女性をも惹きつける

「だから豪さんってば！こんな高いものダメです！」

試着室で店員の女性に少々無理にデコルテドレスやコートを着せられ、装飾品をつけられ、薄いメイクまでされたー！扉を開けて光は椅子に座る豪に少々強い口調で言った

「うつわ似合う！俺のセレクトどう皆？この子俺の妹！すっげえ可愛いでしょ?!」

満面の笑顔で豪は立ち上がり、周囲の微笑む女性店員達にどう？どう？と非常に楽しそうだ

「さあ行きましょー！俺らこれからデートなの！いつてきまーす！」

ネオ青山の小さなブティックーインポート製品が並ぶその高級店は0の桁が全く違う。先程渡されたドレスに合う白いフア付きのコートや靴、アクセサリーなどを豪は選びそれを身につけさせ、困惑する光の手を取り店を出て行く

「豪さんー！」

「はいどうぞお嬢様！乗ってください！どうぞー！」

はははと笑いながら豪はセルシオの助手席に光を乗せ、自分も乗り

込みエンジンを掛ける

「平日だし裏道使うから一時間掛かりませんよお嬢様！さーあ行きましよう！安全運転でねー！ー！」

「・・・」

ふう、と溜息を一つー！それでも決して不快では無かった。彼が明るく元気になったことがただ、嬉しかった

ネオ府中の国定公園ー！平日の為か人は少なく、枯れた木々に少々の雪が積もっているがその整然と整理された広い道に雪は無く歩きやすかった

「寒くねえか・・・？」

車を駐車場に置き、助手席から降りた光に豪は声を掛ける

「大丈夫です。ネオ新宿とは空気が違いますね・・・何だか身が引き締まるみたいです」

温度はかなり低いがその空気は清清しかった。一瞬ぶるつと震えたその細い肩に白いマフラーが掛けられる

「・・・大丈夫ですよ？」

くすりと笑い、豪を見ると彼は照れたように視線を外す

「ー！ー！少し、歩くか」

ゆっくりと歩みだす。光の歩幅に合わすように。不要な露店など全く無い静かな空間。清冽な冷氣とどこまでも続くような長い自然の道。微かに聞こえる冬鳥の鳴き声ー！暫く二人は無言で歩いていった。それでいいと。決して気まずい雰囲気ではなかったー！少ないが道を歩く人々は全てとっていい程光を振り返ったー！それ程彼女は美しく、可愛らしかった

「・・・初めてあの店でお前を見た時・・・妹がマジで生きていて俺の前に現れてくれたんだと思ったんだよ俺はー！俺が想像していた通りの姿だった。きつとあの子が生きていればきつときつとこんな風に可愛らしく綺麗に、清らかな女になっていただろうとー！

「光を見下ろし、そう呟く

「外見だけじゃなかった。その素直で無防備な性格も、雰囲気も全て・・・お前幾つだったっけか？5、6歳で止まったまんまの妹の素直さとその真っ直ぐに俺を見る瞳が――余りにも似ていたんだ。何でお前はそんな無垢な美しさを保ち続けていられるんだ？しかもあの店にいて――NO、1って聞いて驚いたよ・・・」

豪は穏やかに言葉を続ける。見下ろす先の淡い髪に憧憬を持つように「話してみて――もっと惹きつけられた。俺の理想通りだった。

優しくて穏やかで素直で――だが元気で潑刺として――何よりも自分を持つていて・・・はは、俺なんかの妹にしちゃ上等過ぎだ・・・こんな綺麗になるわけねえか、ってな――お前と会った夜はいつもすげえ幸せな気分になった・・・」

光はただ黙って聞いている――自分はそんな上等な人間じゃない。それは弱い自分を克服しようとしたただ足掻いて、子供の殻を被って現実から逃げて――偽りの姿をそこまで理想化している彼に一種申し訳なさを感じる

「あの夜――NO、2が俺の首掴んだ時――大体予想してたが分かった。お前にはヤツがいる。どうしようもねえ位に分かった。だから諦めようと思った――お前を哀しませたくねえ、苦しめたくねえ――だからもう連絡は無いと分かっていた。分かっていた筈なのに苛苛して、女共にあたっちゃった――本当に情けねえ男だよ俺は。目を閉じればあの夜の前のお前の笑顔が、声が強烈に浮かんできやがる。会いたかった、声が聞きたかった――だがダメだと分かっていた――それでも俺は携帯を手放さなかった。寝る時もどこにいるときも。着信すりやすぐ見て――お前じゃなかったら出ないでメールは削除した――だからお前からメールが来たときに・・・不覚にも涙が滲んだ・・・なっさけねえ――俺は幾つなんだよ全く・・・全然強くなってねえよなお兄ちゃんはや？」

自嘲の笑みを光に向ける。そんなにもこの二週間彼は苦しんでいた

のか。自分は何という罪深いことをしていたのか

「……そんなこと、無いです。豪さんは本当に男性らしくてかっこよくて強い方だと思います。……だからそんなにお優しいんでしょう？」

本当にそう思っている。男性の魅力はその強さだけではなく優しさだということは、自分にとつてただ一人の存在によって分かりすぎるほど分かっていた。本当に強いからこそ優しくなれるのだ。豪は初めて会った時から自分に対して非常に優しくしてくれた。それは表面上のことだけでなく、さりげなく嫌な思いをしないよう、困らせないよう。……何くれとなく配慮してくれていたことはとても良く分かったのだ。それは幼い時から自分を守り続けてくれた男を彼女に想起させた。豪と男は非常に似ていると思った。だからこそ。……その過去の傷を乗り越えていなかった以前でも彼といえることは安心感を持っていたのだろう

「……あ、のな……。あのカフェ結構パスタもスイーツも旨いから入るか……。そろそろ冷えてきたしな……。」

だが豪は男とは少々違う。……男は絶対的に自分を守るある意味「上」の存在であり、勿論対等ではあるが男は決して自分に対し困惑するようなことは無かった。常に自分に対し余裕を持って対応してくれた。それは非常に頼りになり絶対的な安心感を持つことが出来たが。……豪は自分の言葉や行動に時折困ったように、照れたように乱れる。陽気で明るく余裕を持って対応している中にもそれは垣間見える。真正面に見える白いカフェに入ろうと言ったその声色は誤魔化すように、その視線は反らされる。……豪は照れているのだ。少女の美しい言葉に

「あ……。ありがとうございます……。」

コートをクロークに預けるとデコルテドレスは少々肩の露出がある。暖房が効いている店内だが少し恥ずかしい。両肩を覆うような仕草を見た豪は取り外しが可能なコートのファを外し、ゆっくりと華奢な肩に掛けた。……非常に女性扱いに慣れた豪の優しさに微笑みで

礼を言い、椅子に腰掛けた

「俺が殆ど弁当食べちまったからお前腹減ってるだろ？何食べる？何でも旨いぜ・・・食事にするか？それとも甘いものでも・・・」
白亜質の壁で清潔な雰囲気を持つカフェだった。木目を現したフロリングの床に採光部分を多くした温室のような空間。非常に明るく気持ちのいいカフェだった。二三組の男女がお茶をしている。壁際の最も光があたるテーブルに光を座らせ、従業員が差し出すメニューを開いて見せる。写真付きのメニュー料理は非常に美しく、若い女性好みのスイーツも豊富だった。メニューも店内のデザイン、内装や調度品、静かに流れるモダン・クラシック。非常に洗練された全体の雰囲気はこのような都下の国定公園の中にあるような店ではなかった

「じゃあ・・・このペンネとアップル・ティーをお願いします」

「甘いものはいいいのか？女の子はケーキとか好きだろ？」

「え？・・・ええ・・・」

「じゃあさ、俺と二人で食おう。ナポレオン・パイとスコーンな。

俺はダーズリンでいい」

豪は非常に楽しそうだったので、微笑んで頷く

「・・・豪さん、よくご存知ですね。このカフェよくいらっしゃるんですか？」

ネオ池袋を根城としている豪がネオ府中国定公園の中のカフェまで詳しいとは、少々意外さを持つて尋ねた

「ん？俺の店なのココ。二年位前にオープンさせたの」

益々の疑問だ。都心ならともかく何故？

「俺の出身この辺だからさ・・・たまに妹思い出すとよく来る・・・昔な、よく来たんだよあの子連れてさ。もっと奥のしょぼい売店でソフトクリーム買ってやると喜んでくれてさあ・・・だからな・・・落ち着ける店作っちゃった」

だからこそ光を連れてきたのか・・・豪は決して辛そうな表情ではない。寧ろ幸せそう

「お待たせ致しました」

落ち着いた雰囲気に従業員が豪に会釈しながら料理や飲み物を運んできた。女性連れなのだ。勿論オーナーとは分かっているが余計な挨拶などはしない。整然と並び終わると静かに去っていった

「あいつ俺の昔のダチだよ。今店長やって貰ってんの・・・な、気に入ってくれたか？この店」

紅茶は本格的な英国形式だった。上品な茶葉は冷えた体に染み渡るような甘く上品な芳香。紅茶は香りを楽しむものなのだ

「はい、すつごく綺麗で落ち着いたお店ですね。緑もよく見えて・・・春に来たらもつと綺麗でしょうね」

紅茶の芳香を楽しみながら一口飲む。豪は嬉しそうに微笑んだ

「桜すげえんだぜこの場所は・・・この温室みてえなガラス天井一杯に花卉で覆われてさ・・・連れてきてえなあーきつとお前すっげえ綺麗だ。その髪の色に映えて信じられねえ位に綺麗だろーな・・・」

照れてしまうような甘い言葉を掛けられる。取繕うようにペンを口に入れた

「！・・・おいし・・・」

料理好きにとつてはこの味付けはなんだろうと思わず考えてしまう程それは美味だった

「旨いか？！そっか・・・良かった・・・これも食べな！これもー」

ぱつと笑顔になり豪は安心したように溜息のような笑い声を発し次々と皿を光の前に差し出す。彼は今妹と共に楽しく食事をしているのだ

「そんなに一杯食べれないですよ？」

思わずくすりと笑った微笑みに豪は見惚れたー！それほどまでにその表情は淡い光に照らされて、光り輝くように美しかったから

「・・・イヤだったらいいんだが・・・今日一日、いや7時までにネオ府中を出れば逆方向だし8時迄には余裕でネオ新宿に着く。だ

から、その・・・それまでいい。妹になってくんねえか・・・いや、かー！？」

少々視線を外し豪は願う。それは昨夜のメールを見てから、いや光を初めて見た時から願っていた本心。本当の願い

「・・・」

その心情は痛い程分かる。躊躇うように、自分の反応を確かめるように視線を何度か向けてくる。その子供のような瞳

「・・・うん・・・お兄ちゃん・・・」

「時間大丈夫か？」

午後7時30分ーーネオ新宿マンションエントランス前にぴったりとセルシオを着け、豪は助手席に座る光に尋ねた

「はい。全然大丈夫です・・・あの、こんなに買って頂いてしまつてすみません・・・ほんとに・・・」

豪は後部座席から幾つもの袋を取り光に渡したーー光は申し訳なさそうに礼をする。ネオ府中国定公園のカフェを出た後豪はそのまま駅前に行き、都下にしては非常に発展している幾つもの店で様々な品を光に買い、贈った。何度も受け取れないと止めようとしたが、ずっと妹に色々買つてやりたかったと言われれば無下に断ることは彼の誠意を裏切ることになる。洋服、装飾品、靴、バグーー持ちきれないほどのその手提げ袋を持って扉を開けようとした

「重いか？ごめんな調子乗って買いすぎちまった俺。その女の力ッコ、誰かに見られるわけにはいかねえだろ？コートで隠して早く部屋行きな・・・」

だがその視線はーー行くな、とでも言うように向けられる。だがすぐにそれは外され「部屋まで持つて行ってやりたいがそれはぜってーダメだよなあ」と努めて明るく、ふざけたように笑う

「すぐですから大丈夫です・・・今日は本当にありがとございま

した。本当に私、楽しかったです」

光は微笑を豪に向け、礼を言う。本当に楽しかったのだ、危険など一秒足りとも感じなかった。豪は明るく常に自分に気を遣い、会話を途切れさせること無く飽きさせず笑わせ――自分が彼を元気付けようと呼び出したのに何だか自分の方が非常に気晴らしになってしまった。あの黒い存在が店に出るようになってから焦燥感を感じていたのは認めたくなかったが事実だったのだから。店とマンションの往復に少々の倦怠感を持っていたのも確かだったのだから――「礼を言うのは俺の方だよ。元気になった。すっげえ元気になったよ・・・ありがとう」

ふ、と――ゆっくりとした動作だったが豪の手袋を外した大きな手が柔らかい頬を覆うように触れてきた

「.....」

そっいう、雰囲気では無い筈だと思い込もうとする。蒼い瞳は逸らされる

「.....来週末――店に行ってもいいか・・・？」

逸らされた蒼い瞳を追う真剣な黒い眼差し――自分は彼に酷いことをしているのではないだろうか？無意識に太客として彼を利用しようとしているのではないだろうか？以前なら考えもつかなかったであろう――計算？あの黒い存在が現れてから自分は変わり始めていると臆気ながら認識する。伊勢教授の予言は当たったのだ

「.....お待ちしてます.....」

でも違う。豪への感情は違う――これ程までに真摯な感情を向けられて計算だけなどあり得ない筈だと――自分はそんな人間じゃない筈だと。夜の世界の接客業を生業とする者達が陥る深淵の感情除々に嵌っていく――計算だけに覆われる精神の暗闇

「――お兄ちゃん・・・またあの公園に連れて行ってね。桜が咲いたら.....」

心が、消えていく――底の见えない、深く重い暗闇に

(後書き)

読んでくださってありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0761g/>

ホストクラブ「Yamato-nadeshiko」番外 「逢瀬」

2010年10月21日22時56分発行